

人生がほんの些細なことで大きく変わるといふことは結構ある。あの時ああしていればと思案する時点で、もう戻れないことも分かっている。40代半ばのTさんの場合は、あの時のあんな会話に惑わされるんじゃないかな、ということだろうか。

車内でふと耳に入った「2時間ちよつとで」の声

3年前の春、転勤して1か月少し過ぎたある日の夜、帰りの電車で珍しく座れた。今夜は自分でカレライスでも作ろうかと考えながら、きょうもパツとした仕事はできなかったことを振り返り、ふつとため息をついて軽く目を閉じた。前にはスーツ姿の男性が3人。上司らしい1人とアタッシューケースを持った2人の若者という顔ぶれだった。3人の会話のやりとりが耳に入った。

「昨日の帰り大変だったんだって？」

「信号トラブルがおさまった後の人身事故ですからね。復旧の見通しはまだないってアナウンスされました」

「最近多いよな。あちこちで。そ

パチンコ依存

第5回

新 相談現場からの報告

柏木 勇一

産業カウンセラー・家族相談士

妻の送金とあふれる愛情に すさんだ心の自分を恥じた

れでどうした」

「ホームはどんどん人が増えるし、ここで待っていてもイライラするばかり、と思って外に出てパチンコに行きました」

「いつも行ってるのかい」

「久しぶりです。こんなことでもなければ行きませんよ」

「で、どうだった？」

「聞いてくれますか。2時間ちよつとで2万円です。ほくほくして帰宅しました。もう電車も動いていましたから」

「のめりこむなよ。たまたまなんだから」

「大丈夫ですよ。仕事第一です」

3人の笑い声も耳に入った。

本社への栄転だったが 息が詰まる課長代理職

Tさんの業種は中堅アパレルメーカー。地方の営業所をいくつか回り、本社に異動した。入社直後こそ1年間で勤したが、それ以来の本社勤務だった。周囲からは「栄転ですね」と声をかけられたが、Tさんにとっては重圧となった。業務は営業企画。旧来型の営業から脱却し、インターネットやテレマーケティングも使って、商品の宣伝

と新規顧客の確保を採る方法を考える仕事だった。これまでとは勝手が違う業務になった。肩書は課長代理。責任があるのかなのか、自分の部下は誰なのか、そもそも部下はいるのか、あいまいな役職だったことも、Tさんを萎縮させた。

どちらかという人と話すことは苦手なタイプだったが、実直な人柄が奏功したのか、営業先では顧客の信頼を得てきた。言葉巧みに売り込むだけが営業ではない、やはり人間味のある接し方が大事と考えていることが心の支えだった。

そんなTさんにとって、勤めてほとんど初めてとも言える内勤職場は、気晴らしができないので息苦しかった。

単身赴任で二重生活 紛らわしたい寂しさ

一人っ子の長男は高校2年。大学受験を考え、転校しない方がいいという指導教諭のアドバイスを受け入れ、妻と長男は前任地に残った。Tさんは単身赴任を選ばざるを得ず、一人暮らしとなった。

借り上げ住宅の便宜など、会社も配慮してくれたが、当然生活費は二重になる。いずれはどこかにマ

イホームを建てたい、という計画で生活を切り詰めていく覚悟だった。外食は楽だが、栄養のバランスを考え、自炊も始めた。

新しい仕事に加えて、生活のやりくりまで悩んでいた時の、電車の中の3人の会話だった。一番響いたのは「2時間で2万円」という言葉だった。本社への転勤と昇格を素直に喜び、よし、これからだと意欲的に仕事に打ち込めていたら、この言葉も軽く聞き流していただろう。ほんの些細なサラリーマンの会話に過ぎないのだから。

しかし、この時のTさんには刺激的すぎる会話だった。これまでも営業の外回りで時間を調整するために時々パチンコをしてきた。勝つたことはほとんどなかったが、腰を据えてその気になれば自分も「2時間で2万円」ができるかもしれない。定時退社だし、夜はどうせひとり。家に帰っても妻も息子もいない。寂しさを紛らわすためにいいかもしれない。頭の中では、パチンコへの肯定的な考えだけがどんどん膨らんでいった。

「2時間で2万円」が頭から消えないまま、Tさんは、3日後の夕刻、会社から二駅離れた駅前通

りのパチンコ店にいた。会社から最寄りの駅前にはさすがに抵抗があった。店内は地方とそんなに変わっているわけではない。スーツ姿の勤め人を中心に人の出入りが多いこと、照明と音楽が派手なことは目立っていた。地方なら仲間同士で来て、結構楽しく話し合いながら台に向かっている姿が多かったが、ここでは一人でやってきて黙々と打っている客がほとんどだった。

実直な性格だから 「粹」を決め楽しむ

この店の状態は孤独なTさんには違和感なく、打ち込めることができた。まわりにどんなに客がいなくても、打っている時は自分ひとり。仕事と違って誰かにペースを合わせる必要もない。気を遣う必要もない。これで儲けることができるなら。前向きになれる空間と時間と思いついた。実直で冷静な性格から、とりあえず週2日、時間も2時間が限度という粹を作った。仕事への影響がないように、という常識的な配慮がスタート時点ではあった。通い始めた直後は勝つ日が続いた。よし、これでいい。このペースでいい。これさえ守れ

ば仕事にも影響しない。「2時間で2万円」までは達しなかったが、「小遣いぐらいは稼げる」という日々が続いた。

都会の夜に一人だけ楽しんでる姿はわびしい、とも思ったが、「これなら二重生活による出費増も苦にならない」とTさんは喜んだ。

職場では無能感に悩み 「粹」は簡単に壊れた

しかし、勝ち続けることは長くなかった。次第に予定の金額を超えて通う日が増えていった。「早く取り戻そう」という焦りが、負けにもつながった。さらに、職場のストレスがのしかかって正常な判断ができなくなっていた。

この時期のTさんの一番のストレス要因は、《パソコンのコンプレックス》だった。初めて経験する営業企画の仕事は、効率的で多面的な情報入手のスキルだけでなく、表作成、表計算のテクニックも欠かせない。

パソコンに慣れた若者には何の苦もないことが、40歳を過ぎたTさんには大きくのしかかる壁だった。外回りの時代は業務報告書を作ればいいだけで、文書入力さえ

できればよかった。しかし、ここで直面することのほとんどが初めての経験だった。マニュアル本を見ながら恐る恐るキーボードをたたく姿を見た若いメンバーから、「簡単なこともできないんですね」と笑いながら話しかけられた。決して嘲笑でもなく、むしろ同情といたわりの言葉だったかもしれないが、Tさんは「若い奴にからかわれた。バカにされた」と受け止めた。

比べる必要もないのに、差があつて当然なのに、若者に感じてしまったコンプレックスに、一人暮らしの空虚感が重なって、Tさんのパチンコ通いは激しくなつていった。週2日、2時間の枠は簡単に壊れた。これまで質素な生活を送ってきた。従って趣味もない。酒を飲むことも少ない。ひとつのことへのめりこむ条件はそろつていた。融通がきかない年齢に達していたことも災いした。

これは知られたくない妻にも子どもにだって

単身赴任後のTさんの家計は妻が管理する仕組みにした。一緒に暮らしていても実態は妻主導だつ

たからそれが自然の流れだった。妻も息子が高校に入ってからパートの仕事をしていた。家計管理は安心して任せることができた。銀行の自分名義の口座に振り込まれた給料から、Tさん用の別口座に送金される。その金額は単身マンションの光熱費とTさんの生活費。金額は多くはなかった。

すぐにパチンコの資金がなくなつた。妻に送金を頼むわけにはいかない。理由もない。何よりもこのような生活をしていることは絶対に知られたくない。妻はもちろん、息子にバレたら父親として、男として合わせる顔がない。

労組からの借金は急増サラ金の看板が目

そこでTさんが考えたのが労働組合からの借金だった。課長代理という肩書だがまだ組合員だった。変な役職だな、と思つていたので、いいこともあるものだとし喜んだ。毎月返済という決まりだったが、とにかくまとまった金を手にすることはできる。秘密は守られるので、職場に知られることもない。返済はふつうなら給料からの天引きだが、窓口で自分で払うと

いう約束を取り付けた。妻に知られてはいけない、という考えからとつさに思いついた選択だった。

後先を考える余裕もなく、「子供の教育費」という偽りの理由で借りた。しかし、この借金も半年持たなかった。「田舎の父親が入院した」という言い訳でさらに借りた。これが消えるまでも時間ばかりかかっていた。月々の返済にはかからなかった。月々の返済に回す自転車操業にもなつていった。

組合は甘くはない。規則も厳しい。3度目はなかった。もう一回、もう一回だけでいい。それ以上は望まない。もう一回だけ大勝ちしたい。そういう思いを胸にTさんはうつろな目で雑踏の中を歩いた。

いくつものサラ金の看板が目についた。何度かドアを押しかけたりした。道行く人の目が気になった。ふらつく足取りを避けるように急ぎ足で去っていく人々に、Tさん自身も目を合わせることはできず、下を見て逃げるように小路に走りこむこともあった。

部下のためだとウツついに妻に送金頼む

とうとう妻を頼った。ある夜「大事な部下の一人が交通事故を起こ

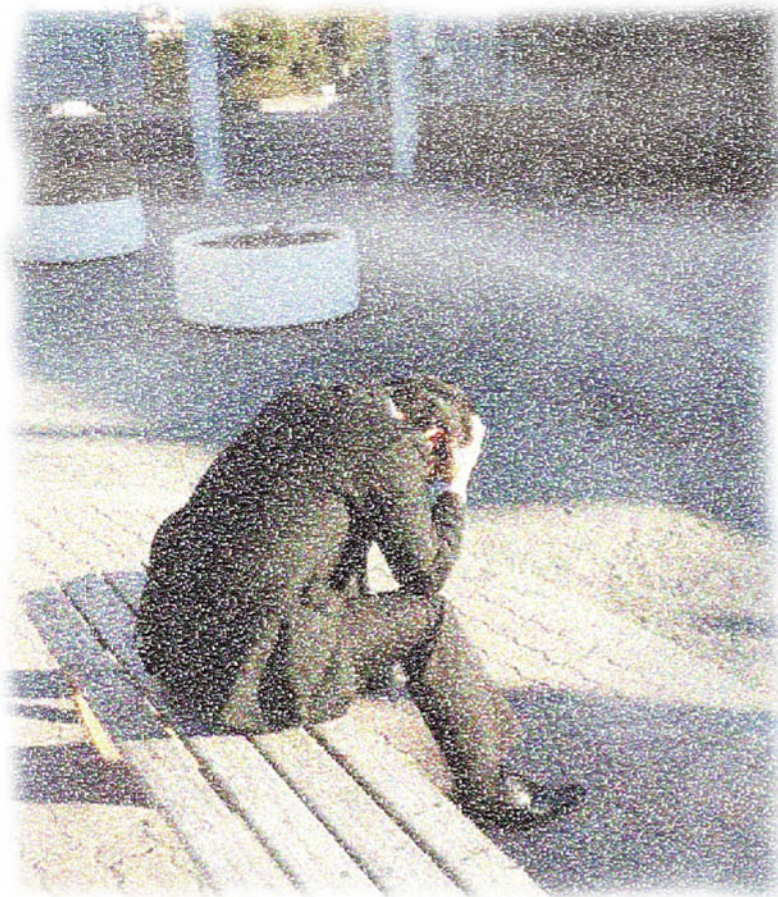
した。歩行者をはねて大怪我をさせた。保険の手続きに時間がかかる。それまで助けてあげたい。すまないが、用立ててほしい」とウソの電話をした。

すぐ妻からは送金を知らせるメールが送られた。希望額を上回る金額だった。数日後には手紙も届き、「都会の一人暮らしご苦労さん。交通事故は加害者も辛いと聞いています。大事な部下の方を支援してあげてください。あなたならできます」と書いてあった。じつとその文面を読むTさんは震えを抑えることができなかった。

あれだけ欲しいお金が届いたのに、Tさんは銀行から引き落とすことができなかった。自分の愚かさを恥じた。「なんてバカなことをしたんだ。妻にまで迷惑をかけたしまった」という自己嫌悪と罪悪感がつり、食事ものどを通らなかつた。眠れなかつた。

職場に出る気力がない布団に潜り込んだ毎日

職場でも仕事らしい仕事をしないでじつと考え込んでいる。急に痩せてきた。ミーティングでも発言はゼロ。さすがに見かねた部長



に別室に呼ばれた。

「最近、体調がすぐれないようだね」と部長が切り出した。

「すみません」

「みんなが心配している。仕事負担になっているのなら別の部署を考えてもいい」

「すみません」

何を聞かれてもTさんの答えは「すみません」だった。

ああ、職場でも気づいていたのか、と錯覚し、翌日から出社する

ことができなかった。部長には「すみません。二、三日休ませてください」とメールを送った。しかし、二、三日で戻ることはできなかった。布団にもぐりこんだままの毎日になった。何とかコンビニでパンやおにぎりを買ってしのいだ。一日一食ぐらいしか食べられなかった。病院に行こう、と何度も思ったが、すべてが億劫だった。夜になると「明日がこなければいい」と思うようになった。

憔悴の夫に妻は泣いた 号泣して全てを詫言

ある日、インターフォンが鳴った。出る気力はなかった。ドアをたたく音が続いた。そして「あなた、お父さん」と呼ぶ、明らかに妻の声が聞こえた。ジャージ姿だったTさんがドアを開けた。妻がしがみつくように倒れこんできた。泣いていた。Tさんも込みあげるものを抑えることができず、その場で号泣した。

妻は、心配した部長からの連絡を受けて駆けつけたのだった。これまでに見たことのない痩せた夫の姿、ひげも伸び放題、清潔感のないジャージ姿、汚れた室内に、ことの異常さを察知した。

Tさんは妻にすべてを話して詫言びた。そして一緒に心療内科へ。「うつ病で2か月間の休養が必要」と診断された。

偽りの金の無心に対する妻の愛情あふれた返事が、Tさんのパチンコをやめさせることにつながった。そこには気弱な善人というタイプであることが垣間見える。自己嫌悪と罪悪感から「このまま消

えてしまいたい」とまで考えていたTさん。思い詰めたまま危険な行動に走ってしまう可能性はあった。それを止めることができたのも心配のあまり駆けつけた妻の訪問だった。

些細なことから人生の危機にはまってしまうTさん。休職が決まった段階で相談を受けた。ゆっくりと、時には涙ぐみながら話すTさんの経緯を聞いた。立ち直ろうとするエネルギーがある限り、必ず回復すること、何よりも人間として変わることができることを理解してもらった。

柏木勇一（かしわざい ゆういち）

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業（Employee Assistance Program）でカウンセラー及び研修講師として活動。
厚労省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士